

細胞で病気再現、治療法開発

希少難病に対抗 「iPSバンク」

京都のNPOが構想

患者数が少ない疾患の
メカニズムを調べ、治療

法を開発するため、京都市の特定非営利活動法人（NPO法人）「希少難病患者支援事務局（SOR D）」が、患者の新型万能細胞（iPS細胞）をバンク化する構想を、同市で開いたフォーラムで6日発表した。

事務局は厚生労働省の難病指定を受けておらず、原因解明や治療薬開発が進まない病気と闘う患者を支援。iPS細胞を活用して研究基盤を整え、治療へ向けた動きを後押ししたい、としている。

iPS細胞は理論上、体外で病気の状態を再現できるため、病原の解明や、iPS細胞から作り出した組織で薬の効能を試すこともできる。

構想では、東海大医学部（神奈川県伊勢原市）が東京大医科学研究所などに協力を呼び掛け、患者の血液の免疫細胞からiPS細胞を作り、理化学研究所（茨城県つくば市）で保管。国内外の研究者へ提供する。国立遺伝学研究所（静岡県三島市）との協力で、患者のゲノム（全遺伝情報）も解析する。

の佐藤健人准教授（免疫学）は「（治療という）山頂へ向け一歩一歩進みたい」と話した。

構想を発表した東海大